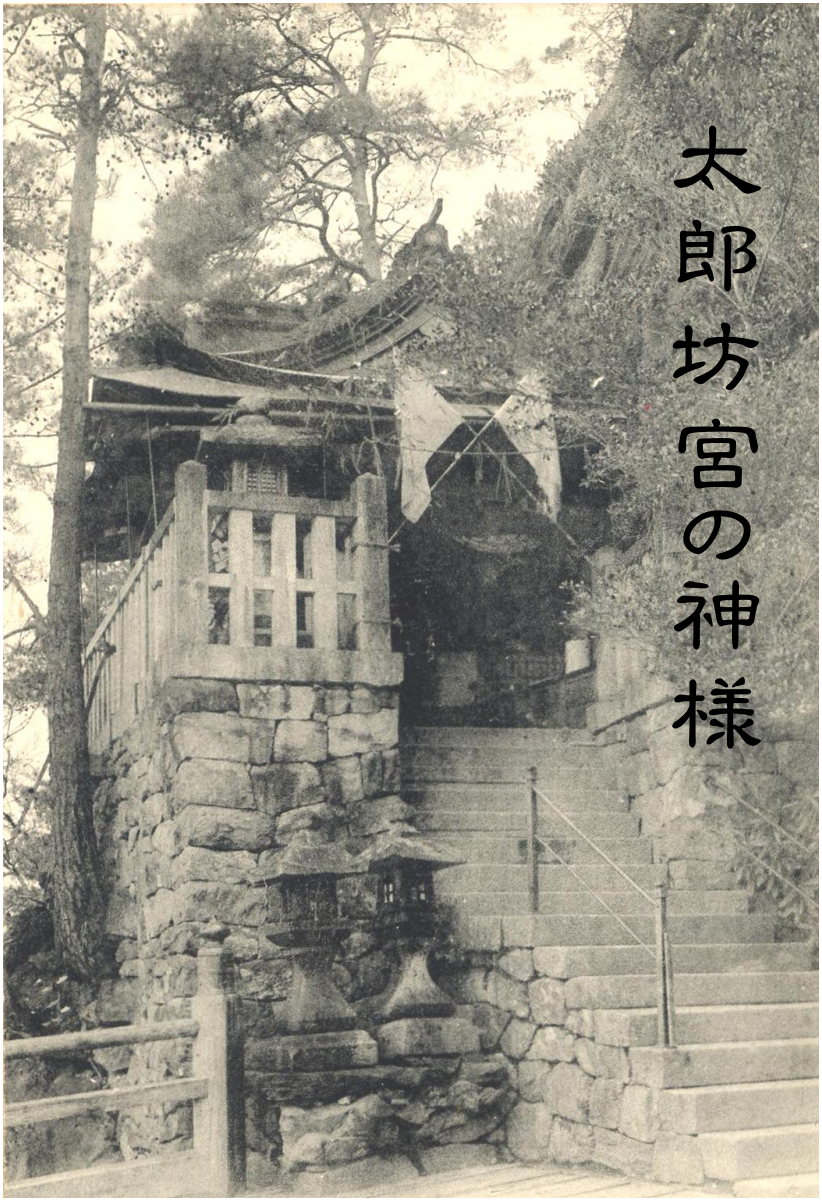


太郎坊宮の神様

伊勢神宮

三重県伊勢市に鎮座する神社。皇大神宮（内宮）を始めとする諸社で構成される。全国の神社の中心的存在として崇められる。

天照大神

最高至貴の神として讃えられる太陽の神。皇室の祖先神として伊勢神宮に祀られる。

第一皇子神

第一番目の皇子神。ご長男の神。

一、太郎坊宮の神様

主祭神 - 正哉吾勝勝速日天忍穂耳大神 -

「太郎坊宮の神様は、太郎坊さんだ」と、おっしゃる方は非常に多い。尊崇の念、或いは親しみを込めて「太郎坊さん」と称される神様のお名前は、正哉吾勝勝速日天忍穂耳大神 という。天忍穂耳大神は伊勢神宮にお祀りされる天照大神の第一皇子神で、あらゆる困難を打ち払い、勝利と幸福を授ける大神として大昔から崇敬を集めている。

古事記

現存する日本最古の歴史書。和銅五年（七一二）に太安万侶（おおのやすまろ）が撰（せん）した。

日本書紀

六国史（りっこくし）の一つで、最古の正史。養老四年（七二〇）に舎人親王（とねりしんのう）らが撰した。

伊弉諾尊・伊弉冉尊（いざなみのみこと）

日本国土を創造した夫婦神。伊弉諾尊は天照大神や素戔嗚尊らの親神でもある。多賀大社等に祀られる。

太郎坊宮が建つ東近江市小脇（おわき）町の地名について、天照大神が天忍穂耳大神を常に脇に抱いて大切に養育されたために「此の脇の子」と称され、後にこれが転じて地名の「小脇」になったという俗信があるほど、天照大神の寵愛（ちょうあい）を受けられた神であった。この天忍穂耳大神がお生まれになった際の様子は、『古事記（こじき）』や『日本書紀（にほんしょき）』に詳しく記されている。

―　母神である伊弉冉尊（いざなみのみこと）を失った悲しみに暮れる

素戔嗚尊（すさのおのみこと）は、父神である伊弉諾尊（いざなぎのみこと）の命令にも従わず、大人になってもただ泣きわめく日々が続いた。もともと粗暴で、いつまでも治世をかえりみない素戔嗚尊に怒った伊弉諾尊は、遂に素戔嗚尊を地底にある

素戔嗚尊

伊弉諾尊の子で、天照大神の弟神。乱暴な行いが多く、天照大神が天岩戸にこもる原因を作る。ヤマタノオロチを退治した英雄譚等が残る。

高天原

天つ神がいる天上の国。天照大神が治める。

遠い根之国へと追放することにした。

追われた素戔嗚尊は素直に命令に従い、根之国へと向うことにした。しかし、最後に姉神である天照大神に一言別れを告げることを思い立ち、高天原を訪れることにした。

素戔嗚尊はとても荒々しい神で、一歩一歩と歩みを進めるたびに天地は鳴り響き、海は大荒れになった。これを見た天照大神は、いよいよ素戔嗚尊が高天原を奪うために侵略してきたと思われた。天照大神は男のような戦装束を身につけて武器を持ち、須佐之男命を待ち受けて厳しい態度で詰問された。別れを告げるためにやってきた素戔嗚尊は、天照大神から激しく問い質されて大いに驚いた。

素戔嗚尊は自分に侵略の意図が無いことや、最後に別れを告げて去るつもりであったことを説明された。しかし、素戔嗚尊が行いの正しくない乱暴者であることをご存知だった天照大神は、嘘偽りのない誠の心を証明するよう求められた。

そこで素戔嗚尊は、天照大神と自分の持ち物を交換し、自分が清らかな心であれば男の神が生まれ出るはずであり、これによって誠の心を証明致しますと言われた。

天照大神はこれを承知し、まず素戔嗚尊の持っていた十握剣（とつかのつるぎ）を受け取り、それを砕いて清らかな水ですすぎ、霧のように吹かれたところ、三女神がお生まれになった。

十握剣

長大な剣の意味。長さが握りこぶし十個程度であることから付けられた名といわれる。

瑞珠盟約（みずたまのめいやく）

素戔嗚尊は己の心が清らかであることを証明すべく、天照大神と互いの持ち物を交換する。

天照大神は弓を手にし、多数の矢を背負って武装している。険しい眼差しを向ける先には素戔嗚尊の姿がある。天照大神の首周りには勾玉（まがたま）飾りらしきものも描かれている。天照大神の脇に控える神々も鎧（よろい）をまとったり、弓矢や鉾（ほこ）を手にしたりして武装している。

これらの神々に対面する素戔嗚尊の手には、長い剣が握られている。

この図版は寛政九年（一七九七）『伊勢参宮名所図会』（国立国会図書館より）からの抜粋。

『伊勢参宮名所図会』は伊勢神宮へ参拝するための案内書として発行された。合計八冊からなり、京都から伊勢神宮に至るまでの名所旧跡について図版を交えて紹介する他、伊勢神宮の祭祀や遷宮についても解説している。江戸時代の人々が伊勢神宮をどのように捉えていたか、当時の伊勢参りはどのようなものであったかを知る上で貴重な資料といえる。

天穂日命

出雲大社の祭祀を司る出雲国造の祖先神として祀られる。

天津彦根命

三重県桑名市の多度大社等に祀られる。

活津彦根命

現在の滋賀県彦根の地名の由来になったといわれる神。

熊野櫲樟日命

出雲の熊野大社や紀伊の熊野三山に所縁のある神といわれるが明らかではない。

この女神はそれぞれ田心姫、湍津姫、市杵嶋姫といい、宗像大社等にお祀りされている。

次いで、素戔嗚尊が天照大神の勾玉飾りを受け取り、同じように砕いて清らかな水ですすぎ、霧のように吹かれた。

すると、今度は五男神がお生まれになった。それぞれ正哉吾勝勝速日天忍穂耳大神、天穂日命、天津彦根命、活津彦根命、熊野櫲樟日命というお名前である。

三女神は素戔嗚尊の持っていた剣からお生まれになったので、素戔嗚尊の子とした。また、五男神は天照大神の持っていた勾玉飾りからお生まれになったので、天照大神の子とした　―

勾玉と管玉（くだたま）

勾玉は、材料（ヒスイやメノウ等）をく字型やコ字型に加工したもの。管玉は、円筒状に加工したもの。どちらも緒（お）を通し、装飾品として用いた。

（図は古墳時代の勾玉と管玉）

八尺瓊の五百箇の御統

「八尺瓊」は大きな玉のこと。「五百箇」は数が多いこと。「御統」は一つにまとまること。

天照大神の勾玉飾りから生れ出た五男神のうち、天忍穂耳大神は第一番目の神であったので、天照大神の長子神とされた。

天忍穂耳大神のように、神々がある物を材料として生成される話は日本の神話に数多く見られる。神が生成される素材となるものを物実（ものざね）というが、その内容は多岐に亘っている。勾玉飾りや剣といった神々の所有物を始め、泡のような自然物、或いは血や体の一部なども物実となって神々を生み出している。

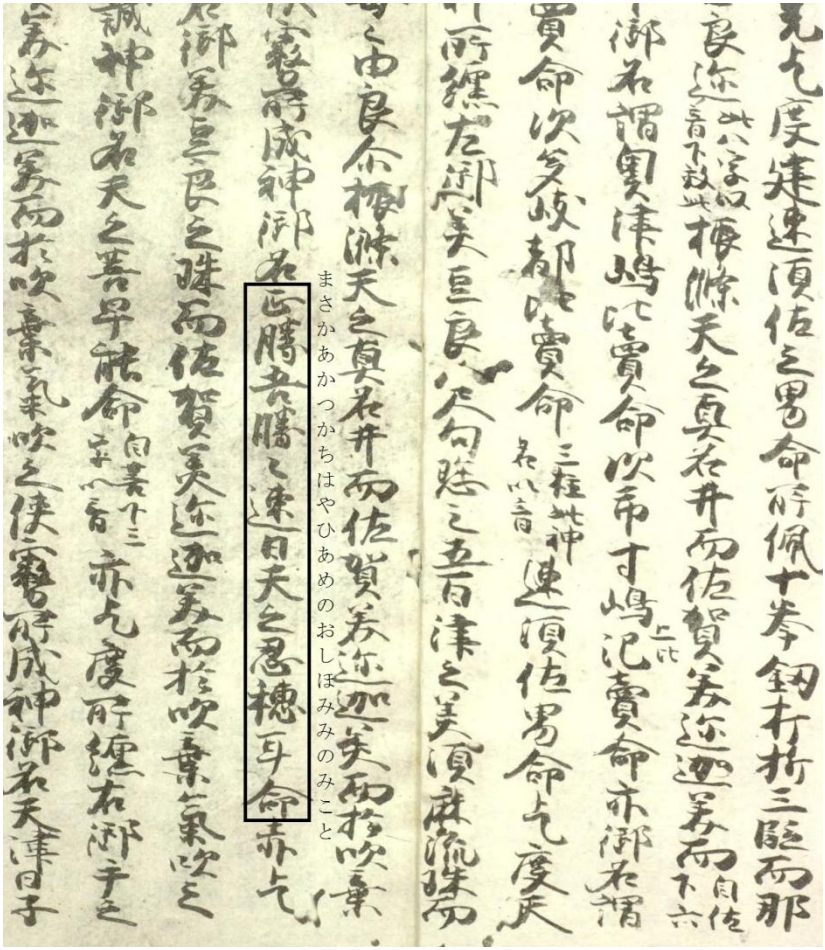
天忍穂耳大神の物実となった勾玉飾りについて、『日本書紀』は「八尺瓊（やさかに）の五百箇（いおつ）の御統（みすまる）」という名で記している。これは数多くの勾玉や管玉を緒に通して輪状にしたもので、首飾りのような装身具とされる。

宇気比（うけひ）

『古事記』はこの出来事を「宇気比」として記す。この語は神々の間で交わされる証明事や誓約のことを指すという。

この「宇気比」により、太郎坊宮にお祀りする天忍穂耳大神はお生まれになった。

下は国宝『真福寺（しんぷくじ）本古事記』部分。同本は応安四年（一三七一）に書写されたもので、現存する『古事記』最古の写本。大須観音宝生院真福寺文庫蔵。図版は国立国会図書館より。括弧とルビは編纂委員会で付した。



まさかあかつかちはやひあめのおしほみみのみこと

三種の神器

皇位の象徴とされる三つの神宝。天照大神より邇邇芸命が授かった。このうち、鏡は天照大神の分身として伊勢神宮に祀られている。また、剣は熱田神宮に、勾玉は宮中に祀られている。

天孫

天照大神の御孫神である瓊瓊杵尊を指す。瓊瓊杵尊は天照大神の子である天忍穂耳大神の子であり天照大神の孫にあたる。

同様の形のものは剣や鏡と共に「三種の神器」の一つに数えられる。また、各地の神社では神前の装飾具として用いられている。

この天忍穂耳大神のお名前の由来について、『日本書紀』は「則称之曰正哉吾勝故因名之曰二勝速日天忍穂耳尊一」という一文を載せている。これは「正に勝った、私が勝った。朝日が昇るように、鮮やかに、速やかに、勝利を得た」という意味が込められており、まさに勝利を確信した雄叫びのようなお名前と言える。

さて、『古事記』『日本書紀』に記されている神話の重要な一節に「天孫降臨」がある。天照大神の御孫神にあたる天津彦彦火瓊瓊杵尊が、地上界を高天原と同じように素晴らしい世とするため、三種の神器を受けて地上界に降臨さ

鏡

日本では弥生時代以降の遺跡から発掘されているが、鏡は古くから祭祀の道具として使用されていた。現代の鏡のように、単純に物の姿を映し出す道具としての用途はなかったといわれる。

（図は滋賀県東近江市の雪野山古墳出土品の鏡。重要文化財。）

れるという内容の神話である。この神話を紐解くと、当初、天照大神より地上界へ降臨して統治するよう命を受けたのは天忍穂耳大神であったと記されている。

―　天照大神は、第一皇子神の天忍穂耳大神に対し、地上界へ降臨して治めるよう命令を出された。

そこで、さっそく天忍穂耳大神は地上界をご覧になったが、とても騒がしく、なにやら乱れている気配があった。そこで、降臨する前にこれらを鎮める必要性があることを天照大神にご報告になった。

騒乱は諸神によって鎮められたので、天照大神は天忍穂耳大神に宝の鏡を渡され、自分の分身として地上界でお祀りするように命じられるとともに、稲

同床共殿（どうしょうきょうでん）

宝鏡を祀るよう命じられた際の言葉。同じ御殿に置き、日々大切に祀るようにということ。

万幡豊秋津姫命

天忍穂耳大神の妃。瓊瓊杵尊を含む二男神を産む。幾つもの名前が伝わるが、どれも織物に関連する御神名。織物の神として信仰される他、安産や子宝等のご利益がある。

穂をお渡しになり、地上界に植えて育て、稔りを得よとも言われた。そして、万幡豊秋津姫命（よろずはたとよあきつひめのみこと）という女神を妻とし、共に降臨せよといわれた。

その後、天忍穂耳大神は全ての用意を整え、いよいよ地上界に降臨されようとした。するとその時、天忍穂耳大神に皇子神である瓊瓊杵尊がお生まれになった。

天忍穂耳大神は色々とお考えになった結果、自分よりも年が若く、生命の力に満ち溢れた瓊瓊杵尊のほうが降臨に相応しいと思われた。そこで、地上界への降臨統治の務めは皇子神の瓊瓊杵尊に譲られることとなった　―

天孫降臨

多くの随伴の神々を従え、三種の神器を奉じて降臨される瓊瓊杵尊。途中、猿田彦大神（さるたひこのおおかみ）の案内も得て、地上に降られた。

神話では地上の世界を指して「豊葦原瑞穂国（とよあしはらのみずほくに）」と記している。これは日本を褒め称えた呼び名で、「瑞々しい稲穂が豊かに実る国」という意味を持つ。

瓊瓊杵尊が降臨された地は九州の高千穂（たかちほ）と伝わる。

狩野探道筆『天孫降臨』神宮司庁提供

木花開耶姫命（このはなさくやひめのみこと）

瓊瓊杵尊の妃。富士山の浅間神社（せんげんじんじゃ）等に祀られる神。とても美しい女神として記される。

神武天皇

瓊瓊杵尊の曽孫。九州を出て東に進み、抵抗勢力を平定。奈良の橿原宮で即位された。

橿原

神武天皇は、奈良畝傍山（うねびやま）の東南「橿原宮」で即位された。現在、橿原神宮（かしはらじんぐう）が祀られている。

降臨された瓊瓊杵尊はその地で妃を得られ、その曾孫（ひまご）にあたる神日本磐余彦尊（かむやまといわれひこのみこと）は、奈良の橿原（かしはら）の地で初代神武天皇（じんむてんのう）として即位された。すなわち、天忍穂耳大神は皇室の遠祖にあたられる神である。

正哉吾勝勝速日天忍穂耳大神は、そのお名前にある通り、勝利を始めとして開運厄除や商売繁盛ほか、ありとあらゆるご利益を授ける神様として昔から信仰を集めている。その御神威の尊さは天下に広く知れ渡り、「神験即現（しんげんそくげん）（神様のご利益がすぐに現れる）」との語をもって尊崇された。

天忍穂耳大神をお祀りする太郎坊宮では、大神の尊いご利益を願う人々が日々誠の祈りを捧げている。

近江蒲生郡志
大正十一年（一九二二）、当時の滋賀県蒲生郡役所が編纂した書籍。郡内の歴史文化、商工産業などを記した地誌。

合祀
神霊（しんれい）や霊魂（れいこん）を一つの社に合わせて祀ること。

神社局
神社行政を司った内務省の一部局。

祠
神仏を祀った小さな社。

相殿神（あいどののかみ）－太郎坊宮に併せ祀られる神々－

滋賀県蒲生郡役所が発行した『近江蒲生郡志（おうみがもうぐんし）』という書籍には「太郎坊宮には多くの神々のお力が加わり、御神威がますます尊く、高まっている」という内容の一文が記録されている。この書物がいうように、現在、太郎坊宮には天忍穂耳大神とともに、幾柱もの神々が併せ祀られている。

その背景には、明治新政府が実施した「神社合祀令（じんじゃごうしれい）」がある。政府は神社の護持（ごじ）運営と尊厳保持の推進を意図し、明治時代初期から小規模神社や祠（ほこら）の整理を実行したが、明治三十三年（一九〇〇）に内務省神社局が設置されて以降、神社の統廃合を国策として推進した。こうした一連の政策を「神社合祀令」といい、統計によるとこの施策によって

明治の神社合祀

国家主導による画一的な神社整理は反感を招き、南方熊楠（みなかたくまぐす）を始めとする知識人が強く反対した。この政策により、多くの祭礼習俗が消失した。

祝詞

神々を祀るとき、申し上げる言葉。

御同殿

同じ建物（御殿）の中。

全国で二十万余社を数えた神社が十一万社程にまで減少したという。

全国規模の神社合祀の中、太郎坊宮では明治四十二年（一九〇九）七月に近隣十社余の神々を併せ祀ることとなった。毎年行われる「合祀祭（ごうしさい）」は、その折に併せ祀られた神々を拝礼する祭儀である。

この合祀祭の祝詞（のりと）には、「太郎坊大神の御同殿」に「蛭子大神」「天満大神」「田中大神」「大将軍大神」「日吉大神」「五社大神」「清水大神」を始めとする多くの神々を併せ祀ったことが記されている。

信心第一を旨に太郎坊宮をお参りされる方々が授かっている尊い御利益を紐解くため、これら合祀の神々についても辿りたい。

蛭子神

七福神の一。釣竿を手にして鯛を抱えた姿がよく知られる。

習合

本来は異なる神と神や、宗教の教えと教えが混同し、同一視される現象。

八日市

近江国蒲生郡の地名。現在の滋賀県東近江市。市場があり、商業地として大いに栄えた。

蛭子大神（えびすのおおかみ）

小脇郷宿村の神。

蛭子大神は市場の守り神である恵比寿神で、福徳や商売繁盛をもたらす神として各地に祀られている。豊作をもたらす農業神としての面も有しているが、これは田の神（たかみ）、山の神（やまかみ）の信仰と習合（しゅうごう）したものと考えられる。

この蛭子大神が祀られていた蛭子神社は、八日市の地名の由来となった「八日市場（ようかいちば）」発祥地に比定されている。『源平盛衰記（げんぺいせいすいき）』に「小脇の八日市」とあるように、定期市としての「八日市」に接した市場の守り神であったと考えられる。市場の神が祀られる場所は村境や橋、辻が多いが、この神社の場合も近くに川と旧街道が存在する。

東近江市が蛭子神社跡の発掘調査を実施した結果、神社

源平盛衰記

中世期に書かれた軍記物語。『平家物語』の異本といわれ、平安時代末期の源平の争いを描く。

氏神

本来は同一氏族の間で祀った神を指したが、時代とともにその土地を守る鎮守神（ちんじゅしん）と混同されるようになった。

小脇郷氏神等帳載願書

江戸時代、公儀に提出された願い状。何らかの理由で帳面に記載されなかった神社や付帯施設等を届け出たもの。

が建てられた時期は平安時代後期以前と推定された。更に、付近からは鎌倉時代から室町時代頃の掘立柱建造物跡も出土している。

市場機能は室町時代頃に別の場所へ移動していたことが土地売券文書群から類推されるが、神社は明治時代まで同村の氏神（うじがみ）として存続した。

江戸時代中頃の書状にも「ゑひす社」とし、宝暦八年（一七五八）の『小脇郷氏神等帳載願書』には「蛭子宮」

灯籠
　神仏に灯火を奉げるための道具。仏教伝来とともに日本に輸入された。

西宮神社
　兵庫県西宮市に鎮座する神社。全国の蛭子神社の総本社として崇敬される。

吉井氏
　西宮神社に代々仕える社家。藤原鎌足の子孫という。

として記されている。社殿の大きさはどちらも「一丈に一丈一尺」として記録している。この神は「宿村の氏神」であり、そのため「境内も支配」していたという。また神輿仮屋が付帯したという。

　現在、神社跡には数基の石灯籠と石碑が残されている。石灯籠のうち、最も古いものは江戸時代中期の天明年間に奉献されたものである。石碑は新しく、昭和四十一年に建立されている。「蛭子神社宮跡」の字は西宮神社の宮司・吉井良地氏の書。

　伝承によると、明治初年に台風で祠が倒壊。神霊を別の所に移したという。また、かつて付近には樹高二十メートルを超える巨大な松があり、人々は「天狗のとまり松」と称していた。

菅原道真（八四五～九〇三）

平安時代の貴族。学者出身としては異例の出世を遂げたが、偽言によって罪を着せられた（図版は『前賢故実』より）。

宇多天皇（八六七～九三一）

平安時代の天皇。菅原道真を起用して政治刷新に努めた。

蔵人頭

天皇の秘書官的な役務を担った非常に重要な職。

左大臣・右大臣

朝廷の政務を司る実質的な総裁。職務はどちらも同じ。

天満大神（てんまのおおかみ）

旧小脇郷成願寺村に鎮座した神。

天満宮（てんまんぐう）は、天神（てんじん）信仰に基づいて天満天神（てんまてんじん）と称される菅原道真（すがわらのみちざね）を祀る神社である。

菅原氏は代々学者の家柄で、道真は当代一流の学者また詩人として高名であった。宇多天皇（うだてんのう）の信任厚く、蔵人頭（くろうどのとう）を経て右大臣に任ぜられた。藤原氏全盛の時代にあって異例の出世であったが、これを妬（ねた）んだ左大臣藤原時平（ふじわらのときひら）の讒言（ざんげん）によって大宰権帥（だざいごんのそつ）に左遷され、悲憤の内に赴任先で没した。

大宰府（だざいふ）

九州にある官庁。外国と折衝する重要な役所で、権帥はその実質的長官。位の高い貴族が流罪になった際の行き先でもあった。

藤原時平（八七一～九〇九）

平安時代の貴族。道真を左遷し、藤原政権を確立させた。

怨霊

恨みを持ち、祟りをなす悪い霊魂のこと。

道真憤死の後、京中に不穏な出来事が重なり、道真を陥れた藤原時平が死没。更には宮中に落雷があるなど皇室にも凶事が続き、社会的に不安定な事件が続いた。人々はこれを道真の怨霊（おんりょう）によると噂し、これを憂いた朝廷は怨霊を鎮めるために道真を流罪前の身分に戻し、より高い位を贈与する処置を取った。こうしたことを背景に、今度は道真の怨霊を天神として崇拝する動きが現れる。

元々は天候を司る雷雨神を「天神」と呼んだが、道真の御霊や仏教思想などと習合し、天満大自在天神（てんまだいじざいてんじん）という神格が形成された。道真自身も後には正一位太政大臣（だいじょうだいじん）の極位極官となり、遂には怨霊から転じて国家の守護神としての地位を得た。

中世になると道真の生前死後に関する逸話を基とし、天

太政大臣
朝廷の最高職。道真の死後、その怨霊を鎮めるために朝廷が最高位の正一位とともに贈った。

天満宮
京都の北野天満宮と九州の太宰府天満宮を中心とする神社。祭神の菅原道真に縁故がある土地に祀られたが、後には日本各地に建立された。

神には学問、至誠、孝道、国家鎮護、交通守護、詩文、和歌、書道といった多種多様なご利益があるとして信仰された。

当地に天満宮が祀られた理由については定見を得ないが、天神信仰は歴史上、盛り上がりを見せた時期が幾度かある。これを「流行神信仰（はやりがみしんこう）」というが、中世以降、折々の世相を反映して日本各地に天満宮が作られている。神仏に祈ることが唯一の救いであった時代、多種多様な天神様のご利益を願い、村落の福利増進を祈って祀ったことに端を発すと思われる。現在でも天神や菅原道真を祀る神社は一万社を超えている。

明治三十三年に発行された『近江國赤神山阿賀神社全圖』には、太郎坊宮に合祀される前であったため「天神」とい

講

同じ信仰で結ばれた人々によって組織される団体。神明講、稲荷講など、多様な形態がある。

う記載がみられる。

現在、跡地には明治四十二年の合祀を記念して建立された石碑が残されている。今でも天神講（てんじんこう）という名の信者の団体があり、毎年一月にこの宮跡に詣でるという。

道祖神
　集落の外部から侵入してくる災いを防ぐために祀られた神。明治時代に入ると、道祖神の祭りは禁止された。

大将軍
　暦（こよみ）の神や方位の神とされることもある。名前から混同されがちだが、武将を祀ったものではない。

平安京
　桓武天皇（かんむてんのう）によって現在の京都に造営された都。

大将軍大神（たいしょうぐんのおおかみ）
　旧小脇郷小脇村に鎮座する神。御神名から、道祖神（どうそしん）の一種とも思われる。大将軍信仰は村の要所に大将軍神を祀ることで、村内へ様々な災いが侵入することを防ぐというもの。
　陰陽道（おんみょうどう）の伝来とともに日本に伝わったといわれ、平安京（へいあんきょう）造営に際しても四方に大将軍神社が創建されている。
　大将軍神はかつて近江国内で広く信仰されていたが、時代の

大将軍跡

現在では祠も失われ、「ショウグン」「ダイジョウゴ」といった地名となって名残を留めるものが多い。

観音菩薩

観世音菩薩。救いを求める人の心に応じて姿を変えるといわれ、日本の民俗信仰に深く根付いている。

推移とともに次第に廃(すた)れていった。後世、跡地に数本の木を残して地名だけになってしまったものが多く、小脇のように残されたものは稀な例といえる。

『小脇郷氏神等帳載願書』には「字里之中　大将軍宮」として記されている。社殿の大きさは「八尺四方」であった。「脇村の氏神」であり、そのため「境内も支配」していたという。

跡地には空殿となった社殿と神輿蔵、石灯籠が残る。石灯籠には享和三年（一八〇三）と文政十三年（一八三〇）の銘がある。後に空殿には観音(かんのん)菩薩(ぼさつ)を祀ったという。

比叡山延暦寺

天台宗の総本山。最澄によって創建された大寺院で、大いに栄えた。元亀二年（一五七一）、織田信長に焼き討ちされた。

最澄（七六七～八二二）

平安時代の僧。近江国の生まれ。唐に渡って学び、比叡山延暦寺を開いた。太郎坊宮山麓の寺院創建に関する伝承も残る。伝教大師。

日吉大神（ひよしのおおかみ）・十禅師大神（じゅうぜんじのおおがみ）・清水大神（しみずのおおがみ）

小脇郷中に広く祀られた神々。いずれも滋賀県大津市に鎮座する日吉大社（ひよしたいしゃ）の御分霊。日吉大社は八世紀頃に創始されたとされる神社で、「日枝」「比叡」と記されることもある。日吉大神は伝教大師（でんぎょうだいし）最澄（さいちょう）が比叡山（ひえいざん）に延暦寺（えんりゃくじ）を開山した後に延暦寺の鎮守となり、天台宗の守護神ともされた。最盛期には境内に百八社、境内外に百八社の神社を有する巨大な神社群であったという。数多くある社のうち、特に主要な二十一社を「山王（さんのう）二十一社」と呼んで尊崇した。この二十一社の中から更に「山王七社」と呼ばれる、より重要な社があった。山王七社は、日吉大社の中心ともいうべき「大宮」から順に、「二宮」「聖真子」「八王子」「客人」「十禅師」「三宮」の七つの社の名称である。

延喜式

律令の施行細則。延長五年（九二七）に撰進された。

中世二十二社

朝廷が折に触れて捧げ物を供えて祈願する二十二の神社。室町時代まで続いた。

僧兵

武装した僧侶。

公地公民

全ての土地や人民は朝廷に属すと定め、私有を禁じた制度。

日吉大社は『延喜式』で「名神大社」という高い格式が付され、中世二十二社にも選定されている。延久三年（一〇七一）には時の天皇のご参拝があり、以降、公家や将軍家の参拝も盛んになされた。平安時代末期頃から、延暦寺の僧兵は日吉大社の神輿を担いで朝廷に強訴することが度々あった。神輿を持ち出し、日吉大社の威光を用いて要求を押し通した延暦寺は、時の政治を左右するほどの権勢を有した。

さて、この日吉大社に関連した神々が祀られた理由は、荘園領地の関係による。荘園とは社寺や貴族が所有する私的な領地をいう。日本では大化の改新以来公地公民の制が取られたが、それが徐々に崩壊し、私有領地である荘園が増加する。平安時代中期以降、各地の有力な社寺は全国各

豊臣秀吉（一五三六～一五九八）

戦国時代の武将。最初織田信長の武将であったが、後に天下統一を成し遂げた。

太閤検地

豊臣秀吉が全国規模で実施した検地。村境を決定し、年貢の基準となる田畑量等を調べた。

分祀

分けて祀ること。

勧請

神霊を迎えて祀ること。

地に荘園を有し、自社を経営する上での財政基盤とした。荘園は豊臣秀吉による太閤検地（たいこうけんち）で否定されるが、数百年の長きに亘って荘園を支配した社寺は領地内に自社の神を分けて祀ることが多かった。これを世に「分祀（ぶんし）」や「勧請（かんじょう）」という。

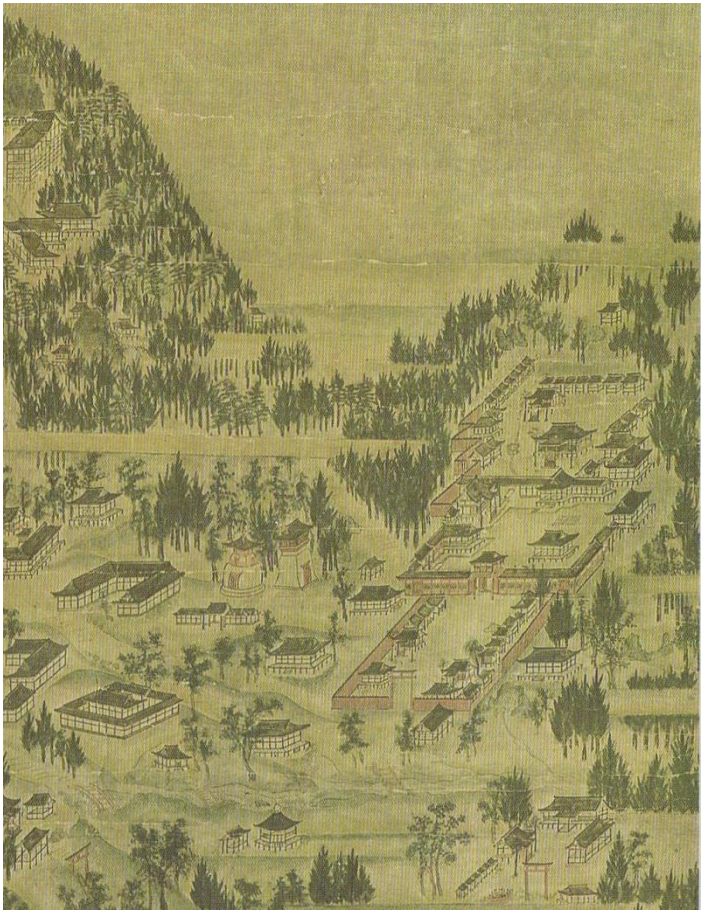
前述の通り日吉大社は延暦寺と強い結びつきを有しており、僧兵の武力を背景にして近江国各地に多数の荘園を有した。鎌倉時代中期には「八日市場」も延暦寺の支配下にあったといわれるが、現在でも東近江市内には日吉大社の御分霊を祀る神社が数多く存在する。

『小脇郷氏神等帳載願書』には「字中嶋　山王権現宮（さんのうごんげんのみや）」「字田之中　十禅師宮（じゅうぜんじのみや）」「字大宮　十禅師権現宮（じゅうぜんじごんげんのみや）」「字八王子　山王権現宮（さんのうごんげんのみや）」と、日吉大神を祀る神社が多数記されている。

日吉大社

全国の日吉神社、日枝神社の総本社。元官幣大社。平安京の鬼門（凶の方角）を守護し、ひいては国家を守護する大社として尊崇された。比叡山延暦寺とも強い結び付きを有し、仏教思想と融合して隆盛した。強力な武力を背景にした権勢は絶大で、俗に山門勢力と呼ばれた。朝廷の権威をものともしない「天下三不如意（思い通りにならない三つのもの）」の一つとされた。

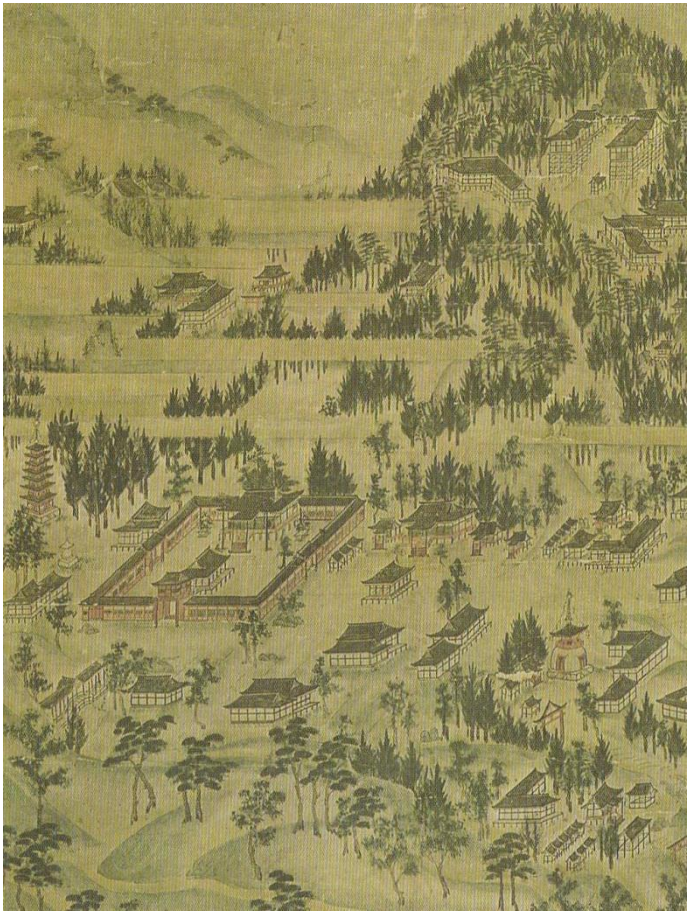
しかし、織田信長による比叡山焼き討ちにより、一帯は廃墟と化して昔日の力を失った。



江戸時代に入り、多くの社殿が位置や形態をほとんど保ったまま再建された。

図版は『秘密山王曼荼羅』といい、日吉大社の所蔵品。製作年代は不明ながら、神仏が融和した日吉大社を描いている。七重塔を始めとする仏教建造物が立ち並び、建造物が境内を埋め尽くしている様子は圧巻である。

日吉大社は、長らく神仏一体の霊場として栄えたが、明治時代の神仏分離にいち早く反応。仏教関係の文物の多くが破却された。



『秘密山王曼荼羅』日吉大社提供

清水神社（写真上）
太郎坊宮の境内外にある管轄社。山王権現を祀る。

金柱宮跡（写真左下）
金柱宮には五社があり、その内の一社が十禅師権現を祀ったという。

十禅師跡（写真右下）
十禅師権現を祀った。

これらの中には明治初年の神仏分離によって社名変更を強いられたものがある。総本社である日吉大社でも明治時代以降に各社名が変更され、更には御祭神の入れ替えまでなされたという。

梁塵秘抄

後白河天皇（一一二七～一一九二）が撰した歌謡集。

山塊記

内大臣中山忠親（一一三二～一一九五）の著。平安時代末期から鎌倉幕府成立期にかけての日記録。

牛頭天王

本来はインドの神という。厄疫を払う神として信仰される。

五社大神（ごしゃのおおかみ）

旧小脇郷の神。『近江蒲生郡志』は五社大神について「金柱宮（かなはしらのみや）」との注記を付している。

金柱宮に祀られた神は「天皇宮」「十禅師権現宮」「神明宮」「岩神宮」「八幡宮」であったといわれる一方、主祭神は牛頭天王（ごずてんのう）であったという説もある。金柱宮は『梁塵秘抄（りょうじんひしょう）』に「新羅（しらぎ）が建てたりし持佛堂（じぶつどう）の金の柱」と記載され、元暦元年（一一八四）の『山塊記（さんかいき）』に「金柱、古麻（こま）長者持仏なり」とある。「持仏」という記載があることと併せても、元来は大陸や朝鮮から渡ってきた神仏であると思われる。これら外来の神仏を蕃神（ばんしん）というが、時代が経つにつれて日本の神々と融合し、郷土の神として崇敬されるに至った。五社大神も、そうした例の一つと類推される。

新羅・高麗

どちらも古代の朝鮮半島にあった国。

土師器・須恵器

須恵器は渡来系の技術を用いた土器で、土師器に比べて高度な技術が必要とされた。

この「古麻長者」の正体は明らかではないが「狛長者（こまのちょうじゃ）」或いは「高麗長者（こまのちょうじゃ）」と表されることもあり、「新羅」とともに外国から移り住んだ人々を指した言葉と思われる。狛長者の一族は太郎坊宮近郊の地を本拠とし、一帯を開拓したと推定されている。金柱宮の跡地からは須恵器（すえき）や土師器（はじき）が出土し、付近からは太い柱の一部が発掘されているほか、古墳も存在することから、既に五世紀には人が生活していたと考えられている。

金柱宮は『梁塵秘抄』や『山

太平記
　南北朝時代の動乱を描いた軍記物語。

院宣
　上皇（先の天皇）や法王（出家した先の天皇）の命を奉じて出される文書。

白鳳時代
　飛鳥時代から天平時代の中間をいう。六〇〇年代後半頃から七〇〇年代前半頃。

茶師
　抹茶や茶葉を精製し、詰めることを生業とした家。

塊記』に記述があることから、平安時代後期には既に有名であったと思われる。『太平記（たいへいき）』にも「金柱大御堂（かなはしらのおおみどう）」と記されており、中世には社殿や堂宇が軒を並べて大いに栄えた。また、境内には商人の宝物とされた「院宣（いんぜん）」を納められた蔵もあったと伝わる。今は他の寺院に安置されているが、白鳳時代の作とされる聖観音金銅像が金柱宮に祀られていたという伝承も残されている。

　金柱宮は近隣数村が氏子として協同で護持したが、江戸時代になって彦根藩井伊氏領、仙台藩伊達氏領、宇治の御用茶師上林氏（かんばやししし）領と、各々の村の支配が分かれると次第に軋轢が生じるようになり、遂には村々の間で衝突が生じ、分立することとなった。

　現在、跡地には石碑が残されている。

自然崇拝

自然物や自然現象を崇拝対象とする原始的な宗教形態。太陽、月、山、川、巨岩などを崇拝する例がある。

阿賀神社扁額（へんがく）

阿賀神社の名を記した額。神社の社殿や鳥居、神輿等に掲げたもの。裏に享保八年（一七二三）の銘がある。

さて、「太郎坊宮」「阿賀神社」という神社名の由来であるが、太郎坊宮は原初的な自然崇拝が創祀の端緒と考えられており、詳細は明らかではない。従って神社名の由来についても数説を挙げるに留めたいと思う。

まず、現在の太郎坊宮の正式名称でもある阿賀神社（あがじんじゃ）の「阿賀」の名については、「あがる（上がる、登る）」「あがむ（拝む、崇む）」が原型とする説や、「あが何々（吾が何々、我が何々）」という語が略化したとする説がある。また、御祭神の名の一部「吾勝」をもって阿賀と称した説もある。その他、神社

宇賀神
穀物を司る神。

泰山
大陸五岳の一つに数えられる名山。霊魂の集う場所とされた。

が建つ「あかがみやま」の語が略転訛したという説もある。

赤神山の名の由来についても諸説あり、「あがかみのやま（我が神の山）」が転じたとする説や、赤色や朱色が呪術的な意味合いを有するとの信仰から発したとする説がある。

他にも穀物の神である「宇賀神（うがじん）」が転訛した説もある。更に、最澄が嘘偽りのない心を表す「赤心（せきしん）」の語を受けて感得し、赤心明神（せきしんみょうじん）という神を祀ったことに由来するという説。

また、山の険しい姿を大陸にある泰山（たいざん）になぞらえ、同山に祀る赤山大明神（せきさんだいみょうじん）から名を戴したという説もある。この赤山大明神は泰山府君（たいざんふくん）や東岳大帝（とうがくたいてい）とも称される神で、寿命を司るという。日本には平安時代頃に伝わり、陰陽道（おんみょうどう）等で盛んに信仰されている。阿賀神社の名の由来として挙げられている主だった説は、以上である。

天狗
　山の奥深くに住み、神通力を有する神の使い。顔が赤くて鼻は高く、翼があって空を飛ぶとされる。

勝軍地蔵
　軍神として尊崇される地蔵尊。甲冑を身に付け、軍馬に乗る。

本地垂迹説
　神の本来の姿は仏で、仏が人々を救うために神の姿をかりて現れたという思想。

　次いで太郎坊宮という名称であるが、これは太郎坊という名の天狗（てんぐ）が守護する神社（所謂「お宮さん」）であることによるという。天狗に関する伝承は太郎坊宮に数多くあり、最澄が赤神山に社殿建立を発願されたとき、山奥から現れて助力したという逸話もある。

　一方で、勝利をもたらすとして尊信される勝軍地蔵菩薩（しょうぐんじぞうぼさつ）が姿を変えて太郎坊権現（たろうぼうごんげん）となり、最澄をこの地に導いて祭祀を行われたことによるという説話もある。この説話は太郎坊宮を護持した寺院の僧侶を中心に説かれたもので、平安時代末期に起こった神仏習合思想（しんぶつしゅうごうしそう）に基づく本地垂迹説（ほんちすいじゃくせつ）を取り入れている。

　本地垂迹説は、仏や菩薩が姿を変えて神となり、人々を救済しに現れるとする思想で、明治時代の神仏分離まで広

熊野三社

和歌山県にある熊野本宮大社、熊野速玉大社、熊野那智大社の三社。

春日大社

奈良県にある神社。藤原氏の氏神として栄えた。

嘉永七年石灯籠

太郎坊の「郎」が「良」になっている石灯籠の一つ。建立は江戸時代末期の嘉永七年（一八五四）。

く浸透していた。太郎坊権現という尊称に含まれる権現という語も、仏や菩薩が人々を救うために本来とは異なる姿で権（かり）に現れるという意味を持つ。神仏習合思想は千年に及ぶ歴史があるために類例も多く、日吉大社が山王権現と称した他、熊野三社は熊野三所権現、春日大社は春日権現といわれた。

太郎坊宮の場合も阿賀神社と記した江戸時代の扁額が現存する一方で、文書類には「太郎坊権現」「太郎坊権現宮」という呼称も用いられている。その他、境内に点在する同時代の石灯籠にも「太郎坊権現」「太郎坊大権現」と記銘したものが多く、その他一部に「太良坊大権現」銘がある。「太良坊」の文字に何かの意味を込めたのか、今となっては定かではないが、文字に厳格ではなかった時代ならではの異

神社名の変更

明治初年、神と仏を切り離す分離令が出て、「太郎坊宮」「太郎坊権現」の名は仏教的だとして禁止された。

太郎

東大寺の鐘を奈良太郎といったり、利根川を坂東太郎といったりした例。長男を意味する場合もあるが、最も優れたものを尊ぶ名でもあった。

風とも思われる。太郎坊権現の尊称は明治時代の神仏分離令によって制限を受けることになり、神社名は阿賀神社へと統一された。そのため、現在の太郎坊宮の正式名称も阿賀神社である。

「太郎」という語には最も優れたものや秀でたものという意味が込められているが、今なお人々からは畏敬と親しみを込めて「太郎坊さん」と呼ばれている。